

収穫前の田んぼ側を散歩しつつ、抜けるような青空を見上げることが、10月楽しみの一つでした。だからか、黄金色に染まった稲が刈り取られたあとは、なんとも寂しく思えました。田植え前に水を張った様もスクスクと伸びゆく稲穂の姿も、その時間が全て元に戻ったように感じたからかも知れません。

稲（の生育）と言えば、田に水を一杯に張っている時もあれば、カラカラにひび割れた田の時もあります。必要な時に必要な水やその他諸々を与えることで、稲は生長します。稲もじっと耐えるべき時には耐える時があるのは生きている証であり、次へ進むための大切なステップのように思えますし、私たち人間もきっと同じです。

我慢や辛抱という言葉を知ると、誰もがしたくないと思うのは人情です。ただ、その我慢や辛抱が必要な時を逸すると、育つものも育ちません。じっと耐えたことによって、大きく飛躍することはよくありますが、それと同じくらい、闇雲に我慢や辛抱をしても無駄なことや効果的ではないことも、私たちは知っています。水が必要な時かカラカラにすべき時かの間（タイミング）は、とても大事です。

大学時代の一時、桂枝雀さんの落語にはまったことがあります。大きな動きと表情で笑いを奪う枝雀さんの落語で私が好きだったのは、その「間」でした。絶妙のタイミングで表情を変えたり大きく飛び跳ねたりする度、寄席は爆笑の嵐でした。噺のネタにあわせた語り口調が少しでもズレると、きっと笑いは生まれません。いつも引き込まれた「間」は、笑いを生むときだけでなく日常のそこかしこに大切さを秘めているように今も思います。

どれだけ正しいことを言っても間が悪いと伝わりませんし、全く逆（ひどいことを言われているよう）に響くことも多々あります。だから、トンチンカンな話をして、タイミングが合えば、ありがたい教訓となるようなこともきっとあるでしょう。内容が大切なのは言うまでもありませんが、「間」を意識することで相手に伝えたいことが届くか否かが結構あるのではないのでしょうか。それでも、まちがったりマヌケなことをしてかしたりするのは人の常。私たちは何度も失敗しては詫びることを繰り返しながらも、我慢が必要な時を見失わないようにしたいと願っています。